

貴船神社（貴船町）

御祭神

たかおかみのかみ
高 雷 神
うけもちのみこと
保 食 命
くしいなだひめのみこと
奇稲田比賣命
すかむのみちさねこのみこと
菅原道實公命



祭 日

夏越祭 八月第一日曜日
例 祭 九月第二日曜日



貴船神社は古くから貴船の里の守護神としてまつられています。

御祭神は、高雷神と申し、湧水、大雨、旱天など水を司る神様で、当町一帯が水田だったところお祀りされたと推定されます。その後、時代とともに田畑が無くなり、住家や商家が増えて、現在の街並になりましたが、水神様の御神徳により、当町には大火がありません。

（貴船連合自治会会長 内山和章）

秋祭（例祭）では、大神輿は車で、小さい神輿は子どもたちが担ぎます。

貴船園では、入園されているお年寄りの方の一部屋一部屋に小さい神輿が回ります。手を合わせ祈っている人や感激に涙する人もおり、自然と子どもとお年寄りのふれあいの場となっております。

一昔前、亀山八幡宮のお神輿が通る時は、赤岸通りの両側の商店や住民の方々、買物客の皆さんがお賽銭を供え、大神輿を拝まれるなど、市内で一番賑った商店街でした。

貴船神社を支えている貴船連合自治会は本当に良くまとまっています。

（亀山八幡宮・貴船神社宮司 竹中恒彦）



下関の貴船神社とは

全国に鎮座する貴船神社の本宮は京都市左京区にあって、その歴史は古い。

本宮由緒によれば、「西暦六七三年」六八六年に在位された天武天皇の時代（飛鳥時代）にはすでに創建され千三百年を超える歴史に遡る。御祭神は「高雷神（たかおかみのかみ）」。本宮には「高雷」、奥宮には「闇雷神（くらおかみのかみ）」が祀られていたと伝えられている。「高雷（たかおかみ）」の「高」は「タケ」の意で「健」「猛」と同義語。対して「闇雷神」の「闇」は暗い谷底」という意味。「高雷」の「雷（おかみ）」という漢字は「龍蛇」のこと。すなわち、「暗い谷の荒々しい龍蛇」という意味となり、社記には「呼び名が違っても同じ神なり」と記されている。人間にとって「火」はとても大事なものであるが、使い方を間違えると大きな災いをも招く。その荒る火を鎮めるため、火の神から水神が誕生した。火を鎮められるのは水だけである。ここに、火と水の大きな関係を窺（うかが）い知ることができるとある。貴船神社の祀る神は水神様であり「高雷神（たかおかみのかみ）」であることを確認しておきたい。

本宮御分霊を勧請され同じ神を祀る分社が全国五百社を数え、神社名が異なっている。御祭神を同じくする神社は「千社を超える」という。「貴船」は「きぶね」と呼び濁り水を嫌（きら）ふ「きぶね」と濁って発音することはない。江戸時代までは「きぶね」を「木船木舟、貴舟、貴布禰、貴布祢」などの字を充てられ現在でも昔の字をそのまま現存しているものもあるが明治になって太政官達により、地域ばらばらの呼称を全国的に統一化「貴船神社」とした。

下関市の貴船神社も濁り読み（きぶね）の歴史は無い。「きぶね」という自治名の起源が「貴船神社」に由来する町名もあり「きぶねちよう」と呼称される。「貴船神社」は地元（の氏）神様として現在も地元（の氏）が支え続けられており、祭祀が行われている。

神社庁に登録されている下関の貴船神社は「前田・田中・貴船・丸山」にある四社であるが、彦島老町に現存するものを含めると合計五社となる。今年の夏から鳥居創建を探索調査を行い、彦島を除く他四社の石鳥居については石工の仕事に共通性が伺え、石に刻む碑文解説で創建をほぼ特定した。以下に創建の古い順に列記する。

一、大字前田：貴船神社 標高52m
創建：安永六 丁酉（ひのと・とり） 九月吉日（西暦1777年）
徳川10代 家治



鳥居柱碑文



二、田中町：貴布祢神社（通称名：五穀神社）標高2m
創建：天明五 乙巳（きのと・み） 十月吉日（西暦1785年）
徳川10代 家治



三、貴船町：貴船神社（旧社名：貴布祢神社）標高14m
創建：寛政十一 己未（つちのと・ひつじ） 十月吉日（西暦1799年）
徳川11代 家斉



四、丸山町：貴布禰神社（旧社名：貴布祢神社）標高30m
創建：文化五 戊辰（つちのえ・たつ） 八月吉日（西暦1808年）
徳川11代 家斉



調査対象四社についての碑文の紹介をしたが、田中町「貴布祢神社（通称名：五穀神社）」と貴船町「貴船神社」は直線距離で三〇㍎と非常に近い位置関係にある。また「貴布祢神社（通称名：五穀神社）」由緒によると、寛政十一年勧請とある。不思議なことに、調査での創建年代と異なるが、貴船町「貴船神社」勧請年代と合致している。それらの偶然から歴史の仮説をたててみた。

江戸湾は明治以前、入り海が赤岸まで達していた。川の本流は無く、入り海に幾本の小川が流れ込んでいた。現在では田中川上流域も暗渠となり、その姿は目視しづらいが整備されている側溝に昔の上流域を確認できる。

さて、「貴布祢神社（通称名：五穀神社）」の位置は海拔二㍎と大変低い位置にある。大雨と満潮が重なると川の水は入り海に放流されず逆流し、周辺を水没させ、農地の被害は甚大。なんとか自然の猛威を鎮める神がほしかった。貴船を勧請した理由は「前田村の貴船神社」に倣うべく、治水が目的であることと、被害で萎えた百姓衆の気持ちを奮立たせる「祈禱」場所の確保であろう。



天明五年 乙巳（きのと・み） 十月吉日 西暦一七八五年に勧請した貴船であったが、台風・高潮・洪水が重なる社殿まで水没させることが、あったかもしれない。社中が水神様を水没させては良くないとの配慮として、入り海の前に見える北浦街道沿いの小高い山へ創建から十四年後の 寛政十一年 己未（つちのと・ひつじ） 十月 西暦一七九九年に、貴船町「貴船神社（旧貴布禰神社）」に分社した。この仮説で五穀神社の創建年月の喰い違いは、説明できないだろう。

時は下り、明治になり入り海の運河が本格的に整備されると、同時に海が埋め立てられた。田中川と呼称するようになったのは、その頃からかもしれない。

現在目視できる田中川は一九五〇年代までは「ドブ川」であった。生活排水が流れ悪臭を放つときもあった。川がキレイになるのは大雨で川が洗われた時だけだった。高度経済成長で家庭からの排水量も格段に増えてきた。山道も谷道もアスファルトで整備されている現代では路面に浸透する水はほとんどなく、表層の水は側溝に流れ、川に下る。昔より現在のほうが圧倒的に川に流す雨水量は増えているはずである。江戸商店街周辺・入江町周辺・貴船町一丁目・四丁目、市内中心部をみても、未だに浸水するところだらけである。

いつの世も、人と自然との闘いは続き、人々は知恵を巡らせながらうまく、生きているように見えるが、本当に闘うべきは自然ではなく、自然に勝てると思っている人の愚かさである。利便性の追求は、また新たな痛みを生んでゆく。

貴船神社を勧請せざるを得なかった先人たちの思いは治水であることを目に、現在の中心部治水事業に本腰をいれ考えてゆかねばならない時期に来ているのではないだろうか。

田中の貴船勧請から約三三五年。未だ先人たちの思いは晴れていない。

令和二年庚子十月吉日

貴船神社氏子 下関まちづくり研究会 主宰 國吉 仁

椋野町一八八五〇（旧関後地村 貴船十二丁）